

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.7, (2009. 3) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000007-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000007-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
1月5日	脳と進化班	講演会 “Contributions of bodily state to emotion: evidence from neuroimaging”
1月10日	哲学・文化人類学班	「医療人類学の最前線 I: 遺伝、神託、バイオテクノロジー」
1月11日	全体 (共催: 心が活きる教育のための国際的拠点 (京都大学))	第2回京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム 「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」 於: 京都大学時計台記念館 国際交流ホール I
1月23日	哲学・文化人類学班	「医療人類学ワークショップ」(午前)、 「医療人類学の最前線 II: 国家、感染、バイオポリティクス」(午後)
1月30日	全体	3施設キックオフシンポジウム
2月2日	全体	プロジェクト科目報告会
2月3日	倫理委員会	倫理委員会
2月8-9日	全体	“Emotional animals, Sensible humans”
2月10日	全体	平成 20 年度若手研究成果報告会
2月25日	哲学・文化人類学班	「<文化と医療>再考—人類学と文化精神医学の相互関与性の現在」
3月2、4日	哲学・文化人類学班	“Philosophical Lectures by Prof. Friedemann Buddensiek” (University of Frankfurt)
3月12-16日	言語と認知	“Uvic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology”

### 講演会 “Contributions of bodily state to emotion: evidence from neuroimaging” (1月5日開催)

去る1月5日、三田キャンパス南館において、人文グローバル COE 主催の講演会が開催された。今回ゲストに招いたのは、Hugo Critchley 教授 (University of Sussex, Brighton and Sussex Medical School) であり、“Contributions of bodily state to emotion: Evidence from neuroimaging” というタイトルでの講演であった。Critchley 教授は、認知神経科学におけるリーダー的存在にある研究者で、情動と身体メカニズムに関する、影響力の大きな多数の論文を執筆している。本講演では、情動と自律神経活動の関連性に焦点を当てた機能的 MRI や PET を用いた機能画像研究について、これまで得られた成果を中心にわかりやすくお話いただいた。

近年、情動の認知神経科学研究は極めて盛んに行われており、年間に200本を超える神経科学的アプローチによる研究が発表さ

れている。Critchley 教授の研究では、脳の活動状態に加え、心拍・血圧・発汗といった自律神経活動にも視点が向けられており、情動がいかに身体の反応に基づいているかを数々の優れた研究によって示している。本講演では、基本感情・恐怖条件づけ・心拍認識・内受容感覚・自律神経制御とバイオフィードバックなどのトピックに関する研究が紹介された。なかでも、心拍認識と帯状回前部および島皮質の活動との関係、および純粹自律神経不全症などの自律神経疾患を対象とした研究は、この研究領域において重要な位置づけを担っており、多くの論文において引用されるものとなっている。本講演は、聴衆にとって、歴史的な視点を踏まえながら関連研究を概観するよい機会となった。講演後も、多くの聴衆からさまざまな質問や意見が示され、活発な議論がなされた。(梅田 聡)

### 言語 / 英語教育講演会+対談「言語リテラシー教育のポリティクス」(2008年12月21日開催)

2008年12月21日(日)、慶應義塾大学日吉キャンパス第四校舎 J14 番教室において、言語 / 英語教育講演会+対談「言語リテラシー教育のポリティクス」をグローバル COE と三田教育学会の共催、慶應義塾大学出版会後援で開催しました。会場がほぼ満員となる300名近くの参加者を得て、大盛会となりました。当初、閉会16時を予定していましたが、参加者も加わった熱い議論が続いた結果、最終的に17時に終了いたしました。

第一部では、東京大学の佐藤さんのご講演「英語リテラシーのポリティクス」を拝聴しました。日本の英語教育の問題点、そしてこれからの日本の英語教育が向かうべき方向について、示唆に富んだお話しでした。

佐藤さんの主張は

- 1 英語教育では、「言語リテラシー」教育として、(母語に加えて)もう一つの言語世界を学習者の中に築くことが重要である。
- 2 その意味で、英語教育は、「言語リテラシー」教育として、国語と一つの教科「言語」に統合する可能性を模索すべきである。

とまとめられます。くわしくは、<http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/>

に当日佐藤さんが使われたスライドのファイルを掲載してありますので、ご覧ください。

第二部は、佐藤さんとわたくしの対談という形をとり、言語教育に関する佐藤さんのお考えをさらに深く知ることができました。2人の考えは、母語教育としての国語教育と外国語教育としての英語教育は言語教育として統合されるべきだという点で共通しており、そこを出発点に生産的な議論が展開できました。

第三部では、登壇者の2人と会場にいる方々との間で議論が活発に行われました。

小学校英語問題、高校英語での「授業は英語で」問題など、混迷を極める日本の英語教育に対して一石を投じる貴重な機会になったと自負しています。なお、この講演会+対談と2008年9月15日に行われた英語教育シンポジウム(既報)の成果をまとめた単行本を準備中です。本年、慶應義塾大学出版会からの6月頃の出版を目指して現在編集作業を行っています。

今後も、英語教育、言語教育関連のシンポジウムやワークショップを開催していく予定です。みなさんの積極的な参加を希望します。(大津由紀雄)

## 合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」(1月11日開催)

平成20年度・京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」が本年1月11日(日曜/12:30-16:30)に京都大学百周年時計台記念館二階国際交流ホール I に於いて開催された。京大矢野智司教育学研究科長の挨拶および京大側拠点リーダー子安増生教授の挨拶と開催趣旨説明、京大と慶大に通底する研究文化について慶大側渡辺茂拠点リーダーが発言、京大側杉本均教授の司会進行により以下のシンポジウムを行った後、同館一階ラ・トゥールで事後検討交流会がもたれた。シンポジウムでは、北米を代表する医療人類学者である Margaret Lock カナダ・McGill 大学教授が基調講演“The Potential Transformations of Self and Society through Biomedical Technologies: A Perspective from Medical Anthropology (生命医学テクノロジー進展に伴って生じうる自己変容、社会の変転について: 医療人類学の視座から)”を行った。北米の臓器移植レシピエントや遺伝子診断を自分の意志でうけた親の調査事例などを引き、生物医学の先進技術の導入により、患者や家族の自己像や出産観等の価値観が変容をしつつある点、制度と社会的過程がそれに伴って揺れ動いて変化し、全体として統一の実感に基づく価値観で医療行為を自己決定していくのが難しくなる状況が進行している点、出産を受け持つ女性にとって新たな負担が生じるなど、先端医療の社会的様相に問題点が多々見られる点、それらの実態を社会的局面の分析重視の医療人類学で比較社会的に批判的に捉える意義が指摘された。杉本教授の司会・日本語訳提示をはさみ〔翻訳・北中淳子准教授担当〕、京大・こころの未来研究センターのカール・ベッカー教授(宗教学・生命倫理)が応答講演“What should Japanese Medicine Learn from Medical Anthropology? (日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか?)”を行った。その内容は、臓器移植と iPS 細胞研究の孕む問題点を中心に、日本での末期医療の患者への臨床的面談、

マサチューセッツ総合病院での赤子延命の多額な医療費を伴う事例や自願望学生への相談等の経験、梅原猛先生等との現代医療批判検討会の経験をふまえ、臓器移植資源が限られている状況で配分を政治家主導の立法や経済的負担能力だけの決定要因にまかせている現状と、基底文化をふまえた新たな社会的コンセンサス形成の必要性、米国で先端医療を研修して日本帰国後それを適用するだけに終始する日本の医師・医療の現状への批判が示された。続いて、京大・鈴木晶子教授(教育哲学)がロック先生へのコメントとして、京大派の系譜に連なる論点がロック先生の講演に深く現れている点、先端科学医療が進むのはよいとしても、直観や身体感覚を信頼して生きる幸福の視点が欠落しがちな現代医療の問題点を指摘した。さらに宮坂敬造は「医療人類学と生命倫理: その相補的關係」と題し、主にベッカー先生への討議として、リスク社会における倫理裁判官的な存在の両義性、文化社会の内部の多様性への着目、文化自体がグローバリゼーションで交錯再帰ネットワーク化するなかで Transcultural 位相をどこに位置づけるべきかについて論じ、ロック先生に代表されるマギル大学医療人類学の傑出した学際性は、各分野の具体的経験をぶつけて論争する開かれた姿勢から展開していることを指摘した。その後、会場質問も交えた質疑討論が活発に行われた〔通訳・北中先生〕。京大側の実証学・臨床学・実践学が結びついた「心が活きる教育」の先端的な研究と慶大側の「論理と感性」の先端的な教育研究の共通項としては、過剰な近代科学偏重主義が人々の日常生活の親密圏に侵入して感性のバランスが崩れている点、それに伴って心の病が増大している現状への批判点があげられるが、この問題の深層の一端が鋭く浮かび上がる公開シンポジウムとなった。最後に、京大側の準備全般と入念なご配慮に改めて感謝の念を記したい。(宮坂敬造)

## 人文グローバル COE 3 施設キックオフシンポジウム (1月30日開催)

2009年1月30日「人文グローバル COE 3 施設キックオフシンポジウム」と題するシンポジウムを開催した。グローバル COE では2007年から2008年にかけて、3つの施設が新しく立ちあげられた。野外生態研究施設(つくば)、MRI 研究棟(綱町グラウンド)、マーモセット実験施設(信濃町リサーチパーク)である。グローバル COE 教員の梅田聡(MRI 施設)・山崎由美子(マーモセット飼育実験施設)・伊澤栄一(野外研究施設)が、各施設を紹介し、それぞれの施設と関連のある領域の第一人者の先生方をお招きし、最新の研究情勢について伺った。

機能的 MRI の基本原理である、BOLD の原理を確立された小川誠二先生(東北福祉大学)は、「fMRI によって、“形”認識部位の specificity の新たな側面をさぐる」と題する講演で、機能画像の新しい測定法である pair-wised stimulus paradigm についての提案と紹介と、研究成果を紹介された。覚醒霊長類を用いて、PET による「知・情・意」の機能局在マッピング法を確立された大林茂先生(独立行政法人 放射線医学総合研究所)は、「マーモセットは脳科学とトランスレーショナル研究に何をもたらすか——霊長類を用いた次世代ポジトロン CT 脳研究への新機軸——」と題する講演を行い、マーモセットをはじめとした霊長類の論理課題の研究や、パーキンソン病をはじめとした疾患の動物モデルの紹介をしていただいた。繁殖行動に関わる研究をはじめ

めとした、鳥類を対象とした研究をされている上田恵介先生(立教大学)は、「托卵鳥(たくらんちょう)研究の新しい展開——ヒナ段階におけるカッコウと仮親(かりおや)の軍拡競争——: 富士山とオーストラリアでの野外調査から」の中で、フィールドにおける産みつける側と産みつけられる側の軍拡競争の比較研究を紹介していただいた。

領域や対象こそ異なるものの、全体を通して活発な議論が展開され、終了後の懇親会においても、多くの聴衆が、活発な討論を講演者と交わっていた。各施設における、今後の研究の発展が期待される。(増田早哉子)

